



親しい仲

宇野千代隨筆集

講談社

親しい仲

昭和四十五年七月二十八日 第一刷発行

著者〓宇野千代

発行者〓野間省一

発行所〓株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二

電話〓東京（九四二）一一二一（大代表）

振替〓東京三九三〇

印刷所〓慶昌堂印刷株式会社

製本所〓有限会社文信社

定価七六〇円 落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

I

雪の正月	11
「風の音」その他	14
文楽と私	18
淡路人形芝居の面白さ	22
失恋上手	24
女流作家といふこと	37
未練	40
那須の家	43
那須日記	45
淡墨桜	49
男性と女性	54

長寿

62

信じる

78

一番好い着物を着て

80

飼ひ猫日記

82

私の特技

87

能力は天与のものか

91

ある詩人の青春と詩

94

一種抽象的な川端さん

96

あの頃の小林さん

100

古い写真

104

河上さんに対する或る畏敬の念

106

梶井さんの思ひ出

109

徳田先生の中にある「自然さ」

112

Ⅱ

アメリカで見たお婆ちゃんたち

117

女のいのち

120

嫉妬心のお化け

125

年齢

128

若い娘は図々しいか

141

高田博厚さんへの手紙

143

青山二郎さんへの手紙

151

女の日記

159

女の生活

193

Ⅲ

困ったお正月

211

親しい仲

花日記

結婚生活とはどういふものかと
いふこと

私の好きな本

帰京記

牧野さんのこと

林芙美子さん

三好達治さんへの手紙

仔犬

IV

日露の戦聞書

あとがき

315	257	246	238	235	232	226	224	221	217	214
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装幀
枋折久美子

親しい仲

宇野千代随筆集

I

雪の正月

私はまた那須に家を建ててゐる。数へてみると、これで家を建てるのは十一軒目である。二十四の齡に最初の原稿料をもとにして、馬込の畑の中に六疊一間と広い土間だけの奇妙な家を建てたのが始めである。百姓家の納屋を引いて来て改造した家だが、窓掛けは銀座の睦屋で買ったつくり仰天するやうな上等のドンスの生地で、その下に吉屋信子さんからもらった鉄製のベッドを置いた。藁葺きの屋根にドンスの窓掛け。そのアンバランスがお得意であつたと見える。

しかし、このアンバランスは二十四の齡から七十二歳の現在まで、ちつとも変わつてゐない。いつでも、思ひつくとたちまち、その瞬間に手をつける。金の用意が充分でない場合がしばしばである。出来上がった家は、出来上がったと言ふだけで、まづ満足である。しかし、さう言ふ順序で建てた家であるから、ある日数が経つと、をかしいくらゐにあつさりと手放してしまふこと

になる。だれかにやつた家もある。借金のかたになつて取り上げられた家もある。売り払つた家もある。あるとき、建ててからぢきに越してしまつたあとでその家に行つて見ると、隣家の竹藪の根が出たのであらう、畳と畳の隙間から筍が生えてゐたこともある。一体これはどう言ふことか。

それにしても、那須と言ふ土地が好きになつて、最初にまづプレハブの六畳一間の家を、それから今度は十四畳一間の家を、そしてまた改めて去年の秋から、沢向かうの土地に四十坪ほどの二階家を建ててゐる。この家が出来上がつたら、もう一生家は建てまいと思ひながら、自分でもこの性癖の突発的な思ひつきに呆れてゐる。この癖は止めなければならぬ、としばしば自戒しながらたちまちそのことを忘れる。ひよつとしたらまた、事情が許せばもう一軒くらゐ家を建てるのではあるまいか。

どうしてかう、家はかり建てるのか自分でもわからぬ。ひよつとしたら、これは、家だけのことではない。何か計画を立て始めると、それと似た同じことを幾度となく繰り返す。いや、計画を立てることだけではない。ある行動を思ひつくと、それが成功しようが失敗しようが、幾度となく、まるで砂の上に楼閣を築くやうに同じ行動を繰り返す。恋愛も結婚もまた同じである。ときには人を相手に修羅妄執の思ひを走らせることもあるが、しかし、いまになると、人を相手に行動をすることはない。それでは、相手は生きてゐる人ではなくて、ただ、家になつただけと言はうか。をかしなことである。これが私の老齡と言ふことなのだから。

那須はこれから雪になる。昨日までは山と言はず野と言はず、見渡す限り葉の落ち尽くした裸木だつたのに、その木々の梢にまで雪が積もつて、一望ただ白一色の風景になる。風が来て、雪が舞ひ上がることもあるが、大抵は高原の強烈な日が雪に反射して眼を刺すばかりである。この部落の内で、冬もこの山にとどまつて暮らしてゐるのは私の家ばかりであるが「那須は寒いでせう」とだれでも言ふのに、私はいつでも、一向に寒くない、と答へることにしてゐる。寒くないと思へば寒くないのである。ゴム長のくつをはいて、もとの家の方から沢を渡り新しい家の方へ上がる。その三百歩ばかりの庭を歩いてゐる間、雪がゴム長のくつの上までかぶさつても、一向に平気である。

吊り橋のたもとにある石地藏の、頭のでつぺんにも肩にも雪が積もつてゐる。むつとりとした美男の顔が、ちよつと悲しさうに見えるのをかしい。雀かも知れない。ちちと鳴きながら雪の上を掠めて行く小鳥の影がある。見ると、ただの枯れ木としか見えなかつた木々の枝の先のどの一つにも、うす赫い萼に、固い芽が包まれてゐるではないか。正月を春と言ふのはかう言ふことなのか。

今年はどこで沢庵も漬けた。餅もついた。もう九分通り出来上がつてゐる家の二階のテラスから、北側には煙を吐いてゐる那須嶽が、西南側には筑波山が、そして東南側の斜面の木々の雪の上を越して、関東平野が一望に見える。「天下の絶景よ」と私はいつでも人に話すのであるが、この果てしのない雑木林の雪景は、見たことはないけれど、シベリアの風景に似てゐるのではあるまいか。

一体に尋ねて来る人はないが、雪になつてからはなほさらである。もちろん、車もチェーンを巻かなければならない。高原の直射日光を一ぱいに浴びて、雪道を散歩する。寒くない。まだほんの一尺五寸ほどの雪だけれど、ぼごぼごとゴム長の埋まる音が快い。山と野原と日光と雪の中に埋もれて、人のゐない私の行動範囲を考へると、それでもまだ、心が忙しない気がするのは、家がまだすつかり出来上がつてないせゐなのか。まだ私にも待つてゐるものがあるのは幸福か。テラスのガラス障子をあけて、胸一ぱいに雪をふくんだ空気を吸ふとき、私はやはり那須に来て宜かつたと思ふのである。

(昭和四十五年一月「東京新聞」)

「風の音」その他

私は去年の暮で満七十一歳になつた。二十一二歳の頃から仕事を始めて、もう五十年にもなるのに、その間、根を詰めて、みつちりと仕事をしたと言ふ記憶がない。それどころか、四十を過ぎる頃まで、一体、文学とは何か、何を目的として仕事をするのかと言ふ自覚さへなかつた。人は信じるかどうか分らぬが、金をとる手段としてしか、仕事をしなかつた。題材は何でも好い。